

世界三大フォールの旅

The Journey to the World's Three Largest Waterfalls

古里明瑠

Akaru Furusato

EICA 名誉会員

学会誌の“箸休め”として、一番無難な旅の話を提供できたらと考えて、この欄を引き受けさせて頂きました。ご期待に添えるか自信はありませんが、気楽にお目通しください。

6年生の春、裏山の椎の大木に初めてよじ登って、まだ、行ったことがなかった川向こうの隣町の街並みを遥かに眺めて「山のあなたの空遠く……」に憧れて以来、「何でも見てやろう」の好奇心旺盛なこともあって、旅は大好きである。国内は47都道府県すべてに一泊以上滞在したことがあり、世界7大陸（ユーラシア、ヨーロッパ、アフリカ、北アメリカ、南アメリカ、オセアニア、南極）のすべてに、点々とながら、歩を記してきた。

さて、本当の水商売すなわち水処理の仕事に、携わるようになって、世界3大瀑布を巡ってみたいと考えるようになったきっかけは、大阪万博（1970）でもらったヴィクトリアの滝のパンフレットであった。当時は海外へ出かけるのは、夢のまた夢で、せめて万博で外国を疑似体験してみようと、何回か足を運んだのだが、長男が生まれる直前だった我が家の山の神には、「自分だけ一人で楽しんできて……」と未だに嫌味を言われている。

1. ナイアガラの滝

それから10年余りが経って、滝巡りの最初はナイアガラ瀑布で、技術提携先が近くにあったことから、出張のついでにアメリカ側から見物した（1981・6）。ナイアガラは世界2番目の大滝とされるが、ご存知の通り、カナダとアメリカ国境の交通至便な地にあることから、訪れた人も多く、自然の偉大さを感じずるよりも一大観光地として開発し尽くされている感が深い。

IWAの第6回ICAワークショップ（1993・6）でも日程に組み込まれていて、EICAの団体旅行メンバーでご一緒頂いた方も多いはずである。というわけで、今更紹介するまでもないが、ご承知の通り川中島を挟んでアメリカ滝（滝幅330m）とカナダ滝（670m）に分かれていて、カナダ滝の方が水量も多く、落差（50m）もあって迫力がある。カナダ滝側のエレベーターで降りて、滝裏をトンネルから見物した際に買わされた“Niagara Fall”ロゴマーク入りのビニール製ポンチョは、今でも雨の日の自転車用に、重宝している。

2. イグアスの滝

世界一の大滝は、南米のブラジルとアルゼンチン国境に懸るイグアスの滝とされる。日本の真裏に当たるので、地球上で一番遠い地域ということになる。アルゼンチンの首都ブエノスアイレス迄、アメリカ経由で空路だけでも26時間、さらにイグアスまでは北上して2時間、とにかく遠い。

2005年2月半ばに訪れたが、南半球は丁度真夏で南回歸線に近い亜熱帯なので、独特の鬱蒼とした森に極彩色の鳥が羽ばたき、ホテルの庭には人なつっこいハナ熊（アライ熊の1種）が徘徊していて、いわゆる南洋的な気候風土であった。

世界四大河川の一つプラタ川の中流域で、ブラジル、パラグアイ国境から流れて南下してやがては本流となるパラナ川に、アルゼンチンとブラジル国境を流れてくるイグアス川がT字型に合流するのだが、そこが3国国境点ということになる。その1km位上流にイグアスの滝が形成されている。落差はナイアガラの50mに対し80m、滝幅が1kmに対し4kmもある。



ナイアガラの滝全景（左がアメリカ滝、右がカナダ滝）

り、とにかくでかい。丁度雨期ということもあって川幅を溢れんばかりの河川水が300もの滝となって連なって流れ落ちている。馬蹄形状の主滝の中心部は、「悪魔の喉笛」と称されている通り、莫大な水量がぶつかり合い怒涛となって地響きを立てながら落下している。上流のアルゼンチン側の河岸から、この落下口の手前まで栈橋状の遊歩道が伸びていて、覗き込めるようになっていたのだが、鉄骨に板を渡しただけの華奢なつくりなので、水煙を被りながら轟音と振動が伝わって、今でも思い出すと足がすくむ。

翌日はブラジル側に渡り、滝つぼ中段の川中島にある栈橋から見上げたのだが、隣にいた少年が、「ゼーンぶ滝だあ！」と叫んでいた通り、見渡す限り周りが滝で囲まれ、水煙に虹が映し出されて、飲み込まれそうであった。アメリカのルーズベルト大統領エレンオア夫人がイグアスの滝を見て思わず「My poor Niagara…… (かわいそうなナイアガラ……)」と呟いたという逸話が、納得の大迫力であった。



イグアスの滝 (右上方から滝中央へ遊歩道栈橋)

3. ヴィクトリアの滝

大阪万博から40年、山の神への罪ほろぼしを兼ねて、2010年ようやく三番目の大滝ヴィクトリアの滝を訪れる機会を得た。南アフリカ国でジャカラントの花が満開になる11月に、ついでに？訪れたが、香港経由で13時間、旧首都ヨハネスブルグで更に乗り継ぎ、ジンバブエ国ヴィクトリアフォール空港まで3時間、今でもアフリカは遠い。

子供のころにイギリスの探検家リビングストンの「アフリカ探検記」に、血沸き肉躍る思いをされた方も多いと思うが、当時暗黒大陸と言われ地図も何の情報もない中、ケープタウンから北上して10年がかりの探検の途中で、1852年ヨーロッパ人として初めてこの大滝を発見し、時の女王名からヴィクトリアの滝と名付けたとされる。

アフリカ中奥部のこの地域は、赤道と南回帰線の間になるので、まさに熱帯である。熱帯と言うので、鬱蒼たるジャングルを想像していたのだが、日本全土よ

りも広い平坦な湿地帯が延々と広がっていて、草原のところどころに森が点在するサバンナ地帯であった。初夏とはいえ、気温は40度を超すが、乾季なので湿度が低く、さほど暑苦しくはない。ただ、熱帯の強烈な太陽で、草も木も枯れ落葉して、まるで日本の真冬のような景色であった。見通しが良いのでサファリには絶好のシーズンで、幾つか体験したが、そのことは、また、別の機会に。バスで移動中、平坦な簡易舗装道路が淡々と伸びている道路わきで、森のこずえの葉を、キリンが食んでいるのが時々見られて、アフリカ大陸を実感する。人家など見当たらない灼熱の道路の、そこかしこでペタペタと歩いている女性がいてびっくりする、たぶん自転車も買えない経済レベルなのかもしれない。

さて、ヴィクトリアの滝は、東流してインド洋に注ぐ大河ザンベジ川の中流域にある。滝つぼが特異な形状をしており、滝幅1700m、滝つぼ奥行き100m位が、溝状にストーンと110mほど陥没したようになっていて、その下流側の一部がえぐれて谷になり、そこから流れ出ている。したがって、滝の真向かいから落下する滝を眺めることが出来る。とはいっても、乾季のこの時期でも滝が落下している真向かいは、水しぶきが上がっていて、近寄れたものではなかった。ただ、流れていない側は、如何にも堅そうな岩盤状の岩肌が露出しており、一般的な滝のように水流で削られて滝が後退して、滝幅いっぱいの下流部が形成されない理由が分かったような気がした。

この下流側流出口の谷川には、鉄道・道路併用橋がかけられており、この橋が国境になっていて、西側(左岸)がザンビア国、東側(右岸)がジンバブエ国で、滝の大半はジンバブエ国になっている。



ヴィクトリアの滝 (橋の手前がザンビア国、向う側がジンバブエ国)

三大滝の感想は、ナイアガラが整備された自然公園の滝、イグアスがワイルドな野生の滝、ヴィクトリアがサファリが似合う未開の滝と総括してみたが、ご経験ある皆さまの感想をお聞かせ頂きたい。